東京帝國大學經濟學會

經濟論叢

第五十七卷第二號

統制經濟の運營……高田保馬
支那銀行業の整備課題……德永清行
ペッティの經濟理論……白杉庄一郎
支那財政改革運動の起點……柏井象雄
明治初年に於ける日本經濟への內省……堀江保藏
合衆國海運委員會「アメリカ海運の經濟的調査」……佐波宣平
彙報

昭和十八年八月發行

ペッティの經濟理論（下）

白杉庄一郎

三

次に私はペッティが地代を分析するに際して示してゐる勞働價値思想を若干くはしく吟味して見ようと思ふ。彼は所謂勞働價値說の先驅者としてしばしば高く評價されてゐるが、事實かれは價格の變動を生產に必要な勞働量に還元してかなり明瞭な勞働價値思想を示してゐる個所が多いのである。たとへば爲替相場のごときも勞働で說明して云ふ。「爲替相場の自然的尺度について私は云ふ、平時における最大の爲替相場は現金輸送の勞働でしかありえない。しかし或る場所において他の場所におけるよりも危險や貨幣に對する急用のあるところでは、爲替相場はそれらの事情によつて支配されるであらうと。」（『租稅論』四八頁）。

しかしながら、一層重要なのは商品價格をその生產に必要な勞働量に還元しようとする努力の見られる點であらう。曰く。「もし或る人が一ブッシェルの穀物を生產しうると同じ時間をもつて、一オンスの銀をペルーの地中からロンドンへ運んでくることができるならば、一方は他方の自然價格（natural price）である。そこでもし採掘の一層容易な新しい鑛山によつて或る人が從來の一オンスと同じ容易さをもつて二オンスの銀を獲得することができるならば、他の事情を同一と假定して以前には五シリングであつた穀物は今や一ブッシェルが十シリングとなるであらう。」（同五〇—五一頁）。

さらに彼は「商品價格の眞實の算定方法」について述べ、「眞正政治的價格」(the true Political Price)といふやうな概念を持ち出してゐるが、その根據も結局は勞働に還元してゐる。まづそれは自然的根據にもとづいて算定される。すなはち、「自然的な高價と廉價とは自然の必需品に必要な人手の多少に依存する。たとへば穀物は、一人の人が十人分の穀物を生産しうるところの方が、六人分くらいしか生産しえないところでよりも廉價である。なほまたそれは人々をして或は多く或は少く消費することを必要ならしめる氣候の事情にも依存する」。これらの事情によつて決定される價格は所謂自然價格である。しかしペッティは商品の價格を算定するにあたつてはこれらの事情のほかに社會的な事情が勘考されねばならぬと考へる。たとへば百人しか必要でない農作に二百人が從事し、一ブッシェルで足るのに二ブッシェルが消費されるといつた事情である。これらの事情を彼は政治的と呼ぶ。そして、「政治的廉價(Political Cheappess)は必要以上の業者の少いことに依存する、すなはち穀物は百人の農夫がなしうると同一の仕事を二百人の農夫がなすやうなところでは二倍も高價であらう」と述べてゐる。自然價格を基礎としこれらの事情を勘考して算定される價格が所謂眞正政治的價格であつて、これと普通の人爲的標準たる銀との比例を求めると「眞正普通價格」(the true Price Current)が得られるといふのである。これらの眞正價格はいづれも自然價格と同じくその生産に必要な——しかも社會的に必要な勞働量によつて決定されると考へてよいのであるが、しかしペッティは價格の算定においてその他の云はば偶然的な事情を無視してはゐない。けだし彼は以上の議論の末尾に次のごとく附言することを忘れてゐないからである。すなはち、「しかし殆んどすべての商品は代用品をもつてをり、また殆んどすべての效用は樣々の用途に役立ち、かつ珍らしいものだとか驚くべきものだとか優れたものだとか或は精査しがたい效果に關する意見といふやうなものは物の價格を增減せし

めるから、商人の得意とする豫測や算定を正しく行ふためには我々は右に述べた永久的原因にこれらの偶然的原因を附加へなければならない。」と（同九〇頁）。また價値と效用との關係を感得してゐたと考へられぬでもなく、「穀物と銀の比率は自然的價値ではなくて人爲的價値を意味するにすぎない、なんとなればそれは自然に有用な物とそれ自體において不必要な物との比較であるからである」といふごとき語も見られる（同上）。しかし價格變動の云はば偶然的な原因の考察が最も明瞭な形をとつて現れてゐるのは、『ダイヤモンド問答』(The Dialogue of Diamonds) と題して傳へられてゐる手稿においてである。それは彼が需要と供給の原理を理解してゐたとしてしばしば引用されるところであるが、云ふところは次のごとくである。

「ダイヤモンドの高價であつたり廉價であつたりするのは二つの原因に依存する、一つは石そのものの中に横はる內在的原因であり、いま一つは次のごとき外在的にして偶然的な原因である。すなはち、(1)ダイヤモンドの產出國におけるその探究の禁止。(2)商人がその貨幣をインドにおいて他の商品に投じた方が一層有利であつて、それをもたらさない場合。(3)戰爭の恐れからダイヤモンドが買占められて亡命者や避難者の生活手段とされる場合。(4)或る大君主の婚禮が近い場合にはそれは高價である、さういふ場合には多くの人々が豪奢な裝ひをするからである。これらの原因のいづれかのために、もしそれが世界の或る地方で非常に高いならば、その影響は全世界に及ぶであらう。もしペルシヤでダイヤモンドの價格が騰貴するならば、イングランドにおいても大いに騰貴するであらう。けだし世界中の大寶石商は相互に相識つてゐて通信をなし且つ相當大きな石については大抵は共同の利害を有し、その賣買に際しては多大の陰謀や共謀を用ひるからである。」（『經濟學論文集』第二卷六二五頁）

ここでは石そのものの中に横はる內在的原因も云はば使用價値にかかはりをもつものとして捉へられてゐる。すなはち彼は「內在的原因は主として四つである、すなはち重さと大きさと色もしくは光澤と瑕のないことであるが、さらにそれに細工の仕方や手際を加へてもよい」と云つてゐる（同上）。したがつてここでは價格の變動がもつぱらその生產に必要な勞働量とは無關係の需要と供給との事情によつて說明されてゐると云つてよいのであ

る。

しかしながら、價値論史の上におけるペッティの名を不朽ならしめるものはどこまでも彼の勞働價値思想である。價格變動の永久的原因を勞働に見た點である。彼のいふ「勞働とは財のための人間の――自然的に堪えうる幾時間にもわたる――簡單な運動である」が、彼はこの種の勞働が財の共通價格であると考へたのであつて、「共通價格 (common price) は完全に成長した一人の人間の日々の勞働 (the days labour of a full grow man) である」と明言してゐる(『未刊文書集』第一卷二一一頁)。

もつとも、ペッティの勞働價値思想には多くの不明瞭な點が殘されてをり、所說は往々にして動搖してゐる。勞働と並んで土地を價値の源泉ないし尺度と考へ、兩者の平衡關係を求めてゐるごとき、その著しい例である。ことに『アイルランドの政治的解剖』(Political Anatomy of Ireland, 1691) においては、このやうな土地と勞働との價値關係を求めることをもつて經濟學の最も重要な問題となし、土地と勞働との價値は食物によつて通約されると考へ、勞働ではなくて食物をもつて價値の尺度となしてゐる。曰く。

「一エーカーの牧場が圍込まれ、そこへ乳離れした犢が放たれると假定する、この犢の目方が十二ヶ月で殖えて食肉となるとすれば、百ウェートのこの肉――それを五十日分の食物とする――と犢の價値の利子とが土地の價値もしくは年地代である。しかるに一人の人間の勞働が――一年間に右の土地をして同種もしくは何か他の種類の食物六十日分以上を生產するやうにさせることができるならば、その日々の食物の超過分が人間の貨銀である。かくして兩者は日々の食物の數量 (the number of days food) によつて表現される。或る人々が他の人々よりも多く食ふといふことは重要でない、けだし一日の食物によつて我々はあらゆる種類と大きさの百人が生き働き生長するために食ふ分量の百分の一と解するからである。また或る種類の一日の食物を生產するには他の種類の食物よりも多くの勞働を必要とするといふことも重要でない、けだし我々は世界のそれぞれの國々の最も容易に得られる食物のことを考へるからである。

「それゆえ、日々の勞働 (the days labour) ではなくて、平均的に見た一成人の日々の食物 (the days food of an adult man, at a Medium) が共通の價値尺度であり、純銀の價値と同樣に規則正しく不變であるやうに思はれるのである。」(『經濟學論文集』第一卷一八二頁)

かくしてペッティはここでは勞働の價値尺度としての機能を否定してゐるのである。もつとも、食物をもつて價値の尺度たらしめてゐるのはアダム・スミスに通ずるところがあるとも云へる。しかしスミスが穀物をもつて價値尺度としたのは、價値尺度としての勞働と無關係なものとしてではなかつた。しかるにペッティの場合には、價値尺度としての食物が持出されると共に價値尺度としての勞働は否定されてゐるのである。

しかしながら、注意すべきことはペッティが同じ個所において土地と勞働の平衡關係に引續き工藝と單純勞働との平衡關係を問題にしてゐることである。曰く。「同じ方法によつて我々は工藝と單純勞働との平衡關係 (a Par and Equation between Art and Simple Labour) を作らなければならない。けだし、もしかかる單純勞働によつて私が一千日に百エーカーを掘起し播種の用意をなすことができるとして、次に一層簡單な方法を研究し同じ目的のために道具を考案するのに百日を費し、その百日間は少しも掘起しはしないが、殘りの九百日で二百エーカーの土地を掘起すと假定するならば、發明するのに百日しかかからなかつた右の工藝は永久に一人の勞働の價値をもつと私は云ふ、なんとなれば新しい工藝と一人の人間とは、それがなければ二人の人がなしえたであらうだけの仕事をなしたからである。」(同一八二頁)。ここには勞働價値說にとつて重要な複雜勞働の單純勞働への還元に關する思想が暗示されてゐると見ることができよう。

ペッティの勞働價値思想において今一つ注意さるべき點は、彼の所謂勞働とはすでに述べたごとく「財のための人間の——自然的に堪えうる幾時間にもわたる——簡單な運動」のことであつたが、しかもそれが利潤を目さ

す云はば資本活動と區別されず、況んやこれに對立せしめられてゐない點である。それは主として資本主義的生産方法が未だ十分に發達せず、資本家と勞働者の分裂が顯著でなかつたといふ事情に由來するといつてよい。そのため彼はまだ地代や利子と區別された利潤の觀念を有してゐないのである。それは彼の分析の不徹底を物語るといふよりは、むしろ現實が分析の對象を提示しなかつたからであると云はなければなるまい。かくのごとく彼の勞働價値思想が資本と勞働との未分前の段階に相卽するものであつたとするならば、いはゆる勞働は資本活動の本質としての企業家活動をも含めたものと云ふことができよう。それは所謂企業家活動をも含めた生産活動一般すなはち廣義の勤勞の意味でなければならない。ペッティのいはゆる勞働をこの意味に解するならば、彼がそれをもつて「富の父にして能動的原理」となし價値の永久的原因となしたのは、經濟の本質に迫つて示唆するところ極めて深いものがあると云はなければならない。勿論、ペッティの勞働價値思想がきはめて不完全であり曖昧なものを殘してゐることは否定できない。しかし富の積極的原理ないし價値の源泉が資本活動との分離以前における勞働において捉へられてゐるところには、それが所謂勞働價値說として一面的に發展せしめられた場合におけるよりも却つて具體的なものをもつてゐたと云ふことができる。アダム・スミス以後リカードを經てマルクスに至るまで、所謂勞働價値說の考へる勞働とは、資本主義的生産方法の發展と共に顯著となり尖鋭化しさへして行つた資本家と勞働者の分離といふ事實に相卽して、資本活動から區別された意味における單なる直接の肉體的な生産活動のことにほかならなかつた。それは資本活動の本質としての精神的な企業家活動といつたものをも含めた生産活動一般すなはち廣義の勤勞といつたものではなかつた。スミス以後の勞働價値說は、ペッティの勞働價値思想を一面的に純化發展せしめることにより却つて、ペッティの思想のもつてゐた含蓄的具體性を犧牲に

して抽象に陷つたと見ることができる。もし勞働價値說が生かされうる側面をもつたものとするならば、それは却つて含蓄的なペッティ的形態においてでなければならない。そしてその形態においてならば、それは舊來の資本主義經濟學を止揚した新しい經濟學の基礎理論として生かされてくる側面をもつであらう。

惟ふに、近代の經濟生活は土地と勞働と資本といふ三つの所謂生產要素のうち資本の支配する生產方法を基底とし、一切の經濟過程が資本に隷屬せしめられるといふ意味において、資本主義的である。來るべき新時代の經濟生活の根本原理はこれに反し生產の主體的契機としての廣義の勤勞すなはち働くといふことでなければならない。資本をもつて利潤を獲得すること卽ち儲けるといふことではなくて、國家のために働くといふことが經濟生活の原動力となるのではなければならない。資本主義ないし營利主義ではなくて勤勞主義でなければならない。この見地から資本主義的經濟體制の成立期にそれを基礎づけようとした經濟思想を回顧して見る時、そこにおいてもすでに生產の主體的契機としての勤勞が重視されてゐた點に氣付くのである。近代的經濟體制は封建的諸秩序に反抗して働く者の立場から自己を形成してきたのである。しかしそれが確立して行くにつれて、近代的經濟體制は自己を疎外して資本主義的經濟體制となつて行つた。働くといふことが自己の利益のために働くといふことであつたからである。そしてまたそこから生產の主體的契機としての勤勞が資本活動と單なる直接の肉體的生產活動とへ分裂して行つたのである。ペッティの思想の中にもこの分裂に導いて行く傾向がないわけではない。しかし私は資本と勞働との未分前の段階に相卽して勞働を重視したペッティの經濟思想に新しい意義を認めうると考へる。それは、現代生かされうる側面をもつたものとして、歷史的にも近代經濟の成立に對し無視することのできない重要な意義をもつてゐたのである。この見地から私は、勞働を重視したペッティの經濟思想の追跡を

もう少し繼續して見ようと思ふ。

四

既に述べた如くペッティは「勞働は富の父にして能動的原理であり土地はその母である」と云ふのであるが、しかも「土地と勞働との收益の割合は勞働者數と共に變動する」と考へる。たとへば、「イングランドの人民は二百年毎に倍加してこ百年内に四倍になつた、そしてイングランドにおける總ての土地の地代の割合はその人民の支出の約四分の一である。したがつて殘りの四分の三は勞働と資本（labour and stock）である。」（同七八頁）。ここに勞働と資本と云ふのは勞働と資本の收益といふ意味であり、資本の收益は彼の見解にしたがへば勞働の所産といふことになる。彼は『賢者には一言を以て足る』（Verbum Sapienti）といふ論文の中に明言してゐる、「我々が國民の富とか資本とか設備と呼ぶものは以前もしくは過去の勞働の結果である」と（『經濟學論文集』第一卷一一〇頁）。

勞働は人民が增加するにつれて增加する。したがつて人民の多少が富を決定するといふことになる。ペッティは述べてゐる。「人民が少いといふことは眞實の貧困である。八百萬の人民をもつ國民は四百萬しかもたない同面積の國の二倍以上富んでゐる。けだし大きな負擔となる支配者は人民が多くても少い場合と殆んど同樣の働きをなすからである。」と。また彼は、もし人民が少くて自然物で生活したり農作などのごとき僅かの勞働で生活することができるならば、彼等は全く工藝を有しなくなるとも云つてゐる（同四三頁）。このやうに人民の多少が富を決定するといふところから彼は刑罰に關して注目すべき結論に到達してゐる。曰く。

「ここで我々は、『勞働は富の父にして能動的原理であり土地はその母である』といふ我々の見解にしたがつて、國家はその成

員の殺傷もしくは投獄により同時に自己自身を處罰するといふことを記憶しなければならない。それゆえ、かかる處罰は（できるだけ）避けて罰金に換へなければならない、さうすれば勞働と公の富は增加するであらう。（註）

「この理由により、殺人罪を犯した財産家は、その手を燒くよりは、その全財産のうちの一定部分を支拂はせた方がよくはないであらうか。

「破産して竊盜を働く者は死刑に處すよりは奴隷に處した方がよくはないであらうか。さうすれば、彼等は奴隷なので自然的に耐えられるだけ多く且つ廉價に勞働させることができる、そしてそれによつて國家から一人が取除かれる代りに二人が附加へられることとなる。けだし、もしイングランドの人口が（たとへば半分だけ）不足してゐるならば、私は云ふ、現在あると同じだけを移入するについで爲すべきことは、今なされてゐる仕事の二倍をなすこと、すなはち或る者を奴隷たらしめることである、と。」（同六八—六九頁）

（註）相似た思想がグラントの『觀察』の中にも現れてゐる。「君侯はその人民の數に應じて强力であるばかりでなく富裕でもあるから（けだし土地が富の母胎であるごとく手はその父であるから（Hands being the Father, as Lands are the Mother and Womb of Wealth）、國家が結婚を奬勵し淫蕩を阻止することによつて自己自身の利益を增建すると共に神の法が侮蔑され冒瀆されるのを防ぐのは決して不思議ではないのである。」（第八章）——ちなみに、勞働と土地を富の父母に譬へるのはペッティの經濟思想の根本をなしてゐるとはいへ、この種の觀念はペッティやグラント以前からあつたものに相違ない、兩人ともこの句を括弧の中に入れてゐるからである（前掲第二卷三七八頁編纂者ハルの脚註參照）。

右のごとく、ペッティは國民の富の增加に對する勞働の意義を高く評價してゐるのであるが、しかしこのやうな生産の主體的契機としての勞働の尊重といふことも、すでに一言したごとくやがては勞働の非人格的手段視へ導いて行く傾向を包藏してゐた。けだし、勞働が單に「財のための人間の簡單な運動」として捉へられてゐたからである。言ひ換へると、勞働が單に物質的な富にかかはるものと考へられてゐたからである。富のためには奴隷の存在でさへ許容されねばならなかつたのである。いな、特定の犯人が奴隷として使役さるべきことが認められてゐるばかりでない。總ての人間が物と同じく、或はむしろ物として富の一部と考へられてゐるのである。す

なはち、ペッティは富を勞働者數したがつて人口の多少に依存せしめたばかりでなく、人間そのものをも富の一項目と考へ、人間の貨幣價値を算定してゐるのである（たとへば『政治算術論』前掲二六七頁）。

しかして、このやうな物質的富の重要視といふことは、ペッティの場合においても、重商主義的な立場と無關係ではなかつたのである。「勞働は富の父にして能動的原理であり土地はその母である」と云つたところからペッティの立場は重農主義的であるなどと云はれることがあるが、彼は『租稅論』をはじめその他の多くの論著において農業を尊重すると共に工藝を尊重してゐるのであつて、彼の立場を重農主義的と云ふのは正確ではない。なるほどたとへば『賢者には一言を以て足る』などにおいては一方において次のごとき重農的見解を示してはゐる。

「イングランドの富は土地と人民にあり、それは全體の六分の五をなしてゐる。しかるにオランダの富はどちらかと云へば貨幣や家屋や船舶や商品にある。今イングランドがオランダにくらべて土地と人民に關して三倍富裕であると假定するならば（これは事實であるが）、そしてオランダが他のものに關して我々より二倍富裕であると假定するとしても（恐らくさういふことはないであらうが）、全體を平均すると我々は彼等よりなほ約二倍富裕である。「イングランドには住民一人あたり四エーカー以上の耕地や牧場や秣場がある、それらは非常に肥沃であつて、それを耕作する一人の勞働は十人以上の最低生活資料を獲得するに足るほどである、イングランドに貧困が現れたり、そのために飢餓に襲はれたりする者のあるのは訓練が缺如してゐるからである。」（同一一七・一一八頁）。

一見これは商業國オランダに對する對抗策として農業の重要性を說く、その意味では重農主義的見地を表示するものであるかのごとくにも見えるであらう。しかしながら、農業の一方的重要性を强調するといふことは彼の本意ではなかつた。彼が强調してゐるのは、勞働を强化し技術の刷新によつて生産力を高めるといふことであつ

た。彼の見るところによれば、オランダに對抗してイギリスの富强を圖る道は、食物や必需品を廉價に卽ち少數の人手でもつて生產するといふことにあつたのである。彼は云つてゐる。「この方法によつて我々は、同じ方法によつてオランダ人が我々から奪つた毛織物貿易を囘復することができるであらう。この方法によつて東印度人は世界の他の涯から我々に我々自身が我國に出來るものでもつて作りうるよりも廉價にリンネルを供給してくれる。この方法によつて我々はフランスから亞麻を輸入しリンネルを供給することができるであらう。但しそれは我々が賣りうる以上を作らず、最少の人手で最も低廉な食物でもつて作りうるだけを作る場合に可能であり、このことはまた食物が他の場所でよりも少數の人手でもつて生產される場合に可能であらう。」と（同一一九頁）。農業は實に貿易のために尊重されてゐるにすぎないと云つてよいのである。彼は、重農主義的であるどころか、重商主義的な口調でもつて斷定してゐる。「私は一般に次のやうに答へる、我々は外國から貨幣を取得し招來するやうな商品の生產に從事すべきである、けだし貨幣はつねに外國または他の如何なる場所からでも我々の必要を充すであらうからである。その價値が一時的と呼ばれ單にその時その所における價値をもつにすぎない國內商品の貯藏はかかる效果をもたないであらう。」と（同一一九頁）。

同樣の思想は『未刊文書集』にも見られる。そこで彼は富を規定して「富（Rich）とは自分自身が使用しうる以上の財をもつことである。」となしてゐる（第一卷二一〇・二一一頁）。しかも、このやうに富を餘剩として規定したペッティは、眞實の富は可滅的な財の餘剩ではなくて、不可滅的な貴金屬や寶石の餘剩にありとなしてゐる。曰く。「可滅的な財やつまらぬ又は一時かぎりの性質をもつごとき財の餘剩利得（superlucration）は富の最善の增加ではない。富の最善の增加は、可滅的でもなければその價値が時間的ならびに場所的な有爲轉變を經驗することも

なく、永久的にして普遍的な富と云つて少しも誤りでない金や銀や寶石などの餘剰利得である。」と（同二一四頁）。このやうにペッティは金銀寶石をもつて永久的にして普遍的な富となし、その追求を肯定してゐるのであつて、そのかぎり彼はまだ重商主義的見解を脱却せるものとは云ひがたいのである。

もつとも、彼は同時に貨幣の本質について或る程度批判的な見解に到達してゐないでもないのであつて、たとへば同じ個所にすでに「貨幣は諸商品の共通の尺度であり、あらゆる人間のあらゆる人間に對する共通の紐帶（a common band of every man upon every man）であり、諸商品の等價物である」といふやうな語が見えてゐるが、『賢者には一言を以て足る』においては流通手段としての貨幣についてかう云つてゐる。「貨幣は政治體の脂肪（the Fat of the Body-Politick）にすぎない、その過少が政治體を病氣にするごとく、その過剰はしばしばその敏捷を妨害する。眞實、脂肪は筋肉の運動を滑かにし食物の不足を補ひ空所を充し身體を美しくするごとく、國家の貨幣はその作用を敏活にし、國内に食物の不足する場合には外國から調達し、その分割可能性によつて勘定をなさせ、全體とくにそれを豐富にもつ特定の人々を美しくする。」と（『經濟學論文集』第一卷一一三頁）。さらに『貨幣小論』においては、一國は貨幣をもつことが少ければ貧困であるかとの問に答へてゐる。「必ずしもさうではない。けだし、最も繁昌せる人々は手許に殆んど又は全く貨幣をとどめておかないで、それを樣々の商品に換へて大利潤を收めるごとく、多くの諸個人の團結したものにすぎない全國民（the whole Nation, which is but Many particular Men united）もまたさうしうる。」と（同第二卷四四六頁）。これらの個所ではペッティが貨幣の單なる重商主義的讃美を越えて商品經濟における貨幣の機能を或る程度ただしく認識してゐたことが認められるであらう。

のみならず、ペッティは外國貿易による貨幣の追求をもつて永久の目的としたのでもなかつた。さきに引用し

たごとく『賢者は一言を以て足る』において外國貿易による貨幣の追求を肯定した後、引續いて述べてゐる。「しかし我々は何時この大產業を休止すべきであらうか。私は答へる、それは我々が確實に我が隣邦のいづれよりも（少しばかりではなく）算術的比率においても幾何的比率においても多額の貨幣をもつ場合、（すなはち）多年の食料を前以て準備し一層多くの現在的動產をもつ場合であると。その場合には我々は何に專念すべきであらうか。私は答へる、神の事業と意志に關する推理とであると。それは懶惰だけではなくて身體の快樂によつても、安穩だけではなくて精神の靜穩によつても支へられなければならない。そしてこの活動はこの世における人間の自然的な目的であり、人間をして來世におけるその心的幸福に心を向けさすに最も適してゐる。精神の運動は他のあらゆるもののうちで最も速かなものであるから、最も多くの變化を與へる、そしてそこに快樂の形相と存在そのものがあるのである。そして我々がこの快樂を多くもてばもつほど、我々はますます多く、無限にさへ、それを能くしうるのである。」（同一一九—二〇頁）

かくしてペッティの見るところによれば、經濟活動は精神活動の云はば前提であり準備であつたのである。そして貨幣の追求そのものを人生の目的としてゐるのではない點は、たしかに、重商主義に對して批判的自覺的であると云はなければなるまい。しかしながら、經濟活動の中に精神活動があるのではなく、經濟活動の彼岸に精神活動を考へて兩者を分離してゐるのは、どこまでも西洋的な考へ方だと云はなければならないであらう。經濟活動が精神性もしくは道義性を失つて、金錢的な富の追求のためには手段を選ばぬといふのが、西洋的經濟觀の必然的歸結であつた。道義性を缺いた經濟活動は來世的な目的の神聖といふことによつて淨化されるかのごとく考へられたのである。精神的勞働と肉體的勞働、精神的な企業家活動といつたものと單なる肉體的な生產活動と

の分裂のごときも、ここに由來するとも云へよう。しかも注意すべきことには、ペッティにおいても經濟活動が精神活動に對する準備を完了して休止されるのは、隣邦以上に貨幣が蓄積される時においてであつた。そして貨幣の蓄積において隣邦に凌駕しこれを制壓するといふことは、重商主義的經濟活動の本質的な動機の一つであつた。その意味でペッティの思想は斷じて重商主義的本性を脱却せるものとは云へないのである。

かくして我々はペッティの『租稅論』その他の論著において重商主義思想よりも深い理論的認識の芽生えてゐるのを認めることができる。しかしそれはまだ重商主義の克服といふところまで行つてゐないばかりでなく、却つてこれに理論的基礎づけを與へるといつた意味をもつてゐさへしたと結論してよいのである。